

---

# 奇跡の軌跡

三条さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇跡の軌跡

### 【Nコード】

N4987H

### 【作者名】

三条さくら

### 【あらすじ】

筆者の高校時代の恋愛をテーマに描いているノンフィクション小説です。大学生の「私」が、高校の同窓会をきっかけに高校時代の恋愛に思いを巡らせる。当時の恋人シンジが、「私」に残したものは？今なお筆者が抱き続けているシンジへの想いを、あなたにも感じてほしい。

## 夏の始まり

久しぶりに高校の卒業アルバムを見返した。ずっしりとした重さが、思い出の多さを物語る。卒業してからすでに2年がたつたらしい。実感はまったくくない。ついこの間までは、制服を着て、毎朝バスで30分の道のりを通学し、みんなで授業を受けたりサボったり、毎日が忙しく、充実していた。楽しくない日など一日たりともなく、文字通り青春だったと思う。一応今は、地元の大学に通っているけれど、高校までのようにクラスはないし、同じコースの子でも受ける授業はみんなバラバラ。お昼にせっかく集まっても、女子特有の陰口タイムが始まり、何だか居心地が悪い。何が楽しいのだからさっぱりわからない。しかし、だからといっていやな顔をしたり、機嫌を損ねたりするのは見苦しい。私は「へえ、そうなんだ」程度に聞き流すよう努めた。そんなふうに使っているものだから、私の気持ちはみるみる大学から遠ざかって行った。大学に行って、また気を使ってへらへら笑わなくちゃいけないのかと思うと、うんざりだったし馬鹿らしかった。そんな今の私には、アルバムの中で精いっぱい笑っている自分や友達の姿が、ひどくまぶしくてうらやましく思えた。

高校の大同窓会の知らせが届いたのは1ヶ月ほど前のことだった。大同窓会というのは、ある年に卒業した生徒すべてが集まる、まさに大規模な同窓会のことだ、うちの高校の名物でもある。卒業以来、高校にはほとんど顔を出していないし、卒業式以降、個人的に会った友人も数えるほどしかない。私は迷わず「出席」に大きな丸をつけて、すぐにポストへと送り出した。私の心の中は、待ち遠しいのただ一言だった。たったの数時間ではあるが、あの青春の日々を共にした仲間たちに会えるのだ。そう思うと、おもわず校歌を口ずさまずにはいられなかった。途中、散歩中の老夫婦が怪訝そうな顔で私を振り返ったが、そんなこと気にも留めないほど私の心は舞い

上がっていた。

返信はがきを出して数日後、卒業アルバムを眺めていると、高校時代の親友ハルカから電話がかかってきた。ハルカとは、1年の時にクラスが一緒になり、それ以降は離ればなれだったけれど、何か悩みができた時はいつもお互いに相談した。どんなときも元気で、面白くて前向きなハルカが、私は大好きだった。

「ハルカ？久しぶり！」

「久しぶり！元気にしてた？」

相変わらずの元気っぷりだ。

「まあね。そっちは？」

「こつちもまあまあかな。ねえ、ところで同窓会行くよね？」

「当たり前じゃん！はがきが来たその日に返信したわよ」

「さすが！私も今日出してきたよ。それにしても、なんか懐かしいよね。高校なんてさ。つい昨日まで高校生だったのに」

「本当ね。今ちょうど、卒業アルバムを見ていたの。みんな、若いなあ」

「たった2年しかたってないのに、おばさんみたいなこと言わないでよ」

「ごめん、ごめん。でもさ、私たちってこんなに笑っていたのね。全然気付かなかった」

「テストとか校則とか、面倒くさいものもあつたけど、そういうのも含めて楽しんでたよね」

ハルカが懐かしそうにつぶやく。そういえばハルカも、最近大学が面白くないって言ってたっけ。さすがは親友同士。そういうところまできつちり似ている。

「ねえ、彼も来るんじゃない？」

思い出したかのようにハルカが言った。一瞬ドキツとしたが、平然と答える。

「彼って？」

「ほら、付き合ってた子！いたじゃない！」

「あー・・・そうだったけ？」

とっさに忘れていたふりをしてしまった。ハル力はすかさず続ける。  
「彼、今どこにいるの？」

「東京の私大に行っただって聞いたけど・・・詳しくはわからない」  
嘘をつく必要なんてないのに、私はまた知らないふうを装った。

「そっか。まあ久しぶりに会えるかもしれないんだから、お洒落していかなきゃね。当日、楽しみにしてるよ」

いたずらっぽくハル力が笑いながら言った。

「こっちこそ。じゃあまた当日ね」

「うん、ばいばーい」

「ばいばーい」

電話を切った後、ふう、とため息が漏れた。そういえば、誰にも言っ  
てなかったな、彼のこと、彼への気持ち。彼 シンジが私に残  
したもの。

シンジのことは、2年で同じクラスになるまで知らなかった。最初  
に彼が私の眼中に入ってきたのは、自己紹介の時だった。今じゃも  
う、はつきりとは思いつけないけれど、確か何か面白いことを言っ  
てクラス中を笑わせていた。

それまでの私には、本当に好きな人と付き合う、という経験がなか  
った。彼氏は何人が作ったけれど、告白されてその勢いで付き合っ  
てしまったパターンがほとんどだったのだ。初めてのキスも、その  
中の一人と済ませていた。感想は「・・・こんなもんか」。

純粹に誰かを好きだ、という気持ち、その時は忘れかけていたの  
かもしれない。特に高校に入りたての頃は、周りがほとんど彼氏を  
作っていく中で、その流れに乗り遅れるわけにはいかなかった。そ  
んなふうにして付き合ったのだから、当然長続きするわけもなく、

ほとんどが3ヶ月とたたないうちに破局となった。最後の彼氏と、数ヶ月前に別れた私は、新しいクラスになったときいわゆる「フリー」であった。しかし、2年生になると周りの「彼氏ゲットブーム」も一段落し、みんなそれぞれが本当の恋愛を求め始めていたため、私自身もそんなに焦ってはいなかった。

シンジのインパクトは日に日に強くなっていった。彼はいわゆるムードメーカー。勉強は得意ではなさそうだったが、授業中当てられてもギャグでさらりとかわす。そのたびに教室が爆笑に包まれ、クラスのだれもが3日もたたないうちに彼の顔と名前を覚えてしまっていた。空手部に所属する彼は体格もしっかりしていて、存在感があった。ちょうど私たちの教室の窓からは空手部の部室が見下ろせた。窓側の席が好きな私は、席替えのたびに窓側を希望していたため、放課後に席から外を眺めていると、練習着に着替えたシンジをよく見かけた。休憩中には部室の横にある水道で勢いよく水を飲み、練習が終わると部室の前でストレッチをするシンジは、部活をしていない私からすると強靱なメニューをこなすオリンピックか何かのアスリートのようにも見えた。教室は3階にあるにもかかわらず、水を飲むときに鳴るのどの音やストレッチの時の彼の息遣いさえも聞こえてくるような気がしていた。それほど彼の動作の一つ一つが研ぎ澄まされ、洗練されていたのだろう。

教室から外を眺めていると時折、シンジが私に気がつくことがあった。初めのうち、私はすぐに目をそらしていたのだが、何度か繰り返すうちに恥ずかしさも薄れ、お互いに微笑むことができるほどになった。目が合い私が微笑むと、彼は、左手はポケットにつっこんだまま右手をさつとあげ、ニコツと笑ってくれた。その一瞬が、私にはたまらなく嬉しかった。

しかし、6月に入ってもシンジとの関係はそこでストップしたままだった。教室内で言葉を交わしたことはまだ一度もなく、相変わらず3階分の距離を隔てて、1秒足らずのコミュニケーションをとるだけの関係。それも毎日ではない。それにもかかわらず、私の中

でシンジの存在は日に日に大きくなっていった。そしてもちろん、それには私自身が一番よく気づいていた。正直、このままでいいなとは思っていなかった。予想以上のスピードで、シンジは私の心に占める面積を増やしていった。ほんの些細なこと　たとえば彼が隣の席の子にペンを貸していたり、退屈な授業中に隠れてマンガを読んでいたりと、本当に些細なことがきっかけでシンジは私を虜にした。彼が何をしても、目がいってしまふ。彼が何を話しているのか、聞いてみたくなる。もしかしたら、仲のいい男の子同士で、恋の話をしてるかもしれない。そう思うと、胸が苦しくなった。私のこと、彼は女の子として見てくれているのだろうか。

状況が変わったのは、夏休み前最後の席替えの時だった。いつも通り私は窓側の席を希望し、係が新しい席順を発表するのを待っていた。

「それでは、1学期最後の席順はこちらです！」  
という係の発声で、席の書かれた広用紙が黒板に貼り出された。ワツとみんなが黒板に押し寄せて自分の名前を見つけては、ヨッシャーだの、ありえなーいだの叫んでいる。群衆をかき分けようやく広用紙にたどりつき自分の名前を探す。

見つけた。私の希望はまたしても叶えられ、どうやら1学期中は窓側の席でいられるようだ。しかも、一番後ろの席。私がひそかにVIP席（特別席）と呼んでいた憧れの場所だった。

「みなさーん、席は確認しましたか？各自移動を始めてくださーい！」

係の声が鳴り終わらないうちに、それぞれが机といすをギーギー引きずりながら移動を始めた。私は一番後ろに下がるだけなので、案外すぐに移動が終わってしまった。ガチャガチャと移動をしているクラスメイトをよそに、一足早くVIP席からの眺めを味わう。騒

々しい教室内とは違い、外は静かだ。梅雨明けした空から、するどい日差しが地面にまっすぐ伸びている。息を吸い込むと、焦がれたアスファルトのおいがした。夏が、すぐそこまで来ている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4987h/>

---

奇跡の軌跡

2011年1月27日11時06分発行